



# スウェーデンの森は、 IoTの森だった。

林業が、  
先進ビジネスになっていた。  
日本へのヒントが  
あると思った。

「本切ったら、2本植える。スウェーデンの森のルールです。森のオーナーの言葉にスウェーデンという国の「意思」を感じた。ベトナムという小さな町。夏の初めの空は、この国の国旗のブルーより濃く、樹齢500年を超すブナの葉が、風に悠然と揺れている。日本のように高い山や深い谷の地形ではない。草原がそのまま深い森に近づいていた。森を守りながら、林業というビジネスも成長させていく。この国の林業は、極めて計画的だ。どの樹種の、どの太さの、どの長さの丸太が、需要があるのか。そのために、どのエリアの、どの木を切り、どれだけの丸太を生産すれば、ムダな伐採をすることなく売上げを増やせるのか。見える化された地形データ、木材の価格データ、それに森のオーナーの経験を加味して判断された伐採計画が、コマツのクラウド・ネットワークに入力される。朝、8時。コックピットに座ったオペレーターは、データにアクセスし伐採計画を確認すると、GPSのルート案内に従って、現場へ向かう。そこにあったのは、ただ美しいだけの森ではなかった。木と人と機械と市場がデータでつながった森だった。

Wheeled Harvester 951

Forwarder 845

屈強な森の男を思わせる赤い手が、木の幹を掴んだ。ハーベスター（収穫する者）と呼ばれるマシンだ。高さ20m、直径40cmほどのブナが静かに倒れる。オペレーターは、左右のレバーと20ほどもあるボタンを駆使し、マシンを自在に操っていく。その姿は、映画に登場する巨大なロボットと操縦士のようにさえ見える。マシンの手は、枝打ちと玉切りを同時にに行い、決められた長さ・太さの丸太を次々に生みだしていく。その早業は、ぜひ映像でご覧いただきたい。位置情報、丸太の長さ、太さをセンサーが読み取り、データが自動送信される。フォワーダーという運搬車が現場に到着した。受信した丸太の位置を把握し、荷台上に積んでいく。スウェーデンにも、かつて伐採により森が衰退した時期があった。この国は、ルールを変えたのだ。1本切ったら、2本植える。嵐など自然の力で倒れた木は、鳥や昆虫たちにありのままの森を遺すために、手をつけない。この森で30年働いている男が、教えてくれた。「知恵と工夫で森は育てられる、と私たちは信じています。私の30年でも、この森は育ちました。森と人と機械をデータでつなぐスマート林業。コマツのテクノロジーも、知恵と工夫のひとつなのだ。森を愛する人たちは、知っている。人は、森からたくさんさんのものをもらって生きていることを。スウェーデンの森林資源は、100年前の2倍弱に増えたという。

人々のための  
道具だから。  
社会のための  
道具だから。